

レーゲンスブルクのパタヒアの旅行記－ 2 －レーゲンスブルクと中世ユダヤ社会－

関根 謙司*

This thesis (Part 2) has been written about a Hebrew travel book by Medieval Jewish traveler, Patachia of Regensburg (d.1225). The Author was a Jewish scholar (rabi) born and grown in Regensburg under Holy Rome Empire where should become a free imperial city in 1245.

His travel book has been different to other Jewish traveler in Middle age, because his travel book was not a guide book, but a geographic, geopolitic, historical book for Jewish reader.

Regensburg, or Ratisbon, was a capital city in South Germany along to the Danube. It was well known not only as a political, cultural and economical city, but also as a trade commercial city for Medieval Jewish community. This thesis should be aimed to analyze a Jewish social life in the 12th and 13th century.

Key words : Patachia, Ratisbon, Medieval Age, Jewish, Travellers

1. パタヒアの流行

パタヒアの旅行は、故郷のドナウ川に面した中世都市のレーゲンスブルクを出発し、プラハ、ポーランド、ロシア、キエフを経て中央アジアのユダヤ教国家のハザール王国を通り、黒海の東側を経由し、グルジアからイスラム王朝として栄えたセルジューク朝、アッバース朝のニシビスを起点にモスル、バグダード、スーサ、ヒーラ、ネハルデアと周遊し、またモスルからダマスカスに足を延ばしている。彼の歩いた痕跡は、日本語版の地図を作製しようと試みたが、完成したのが Part 1 の原稿提出後だったので、まず Part 2 の冒頭に紹介することにする¹⁾。

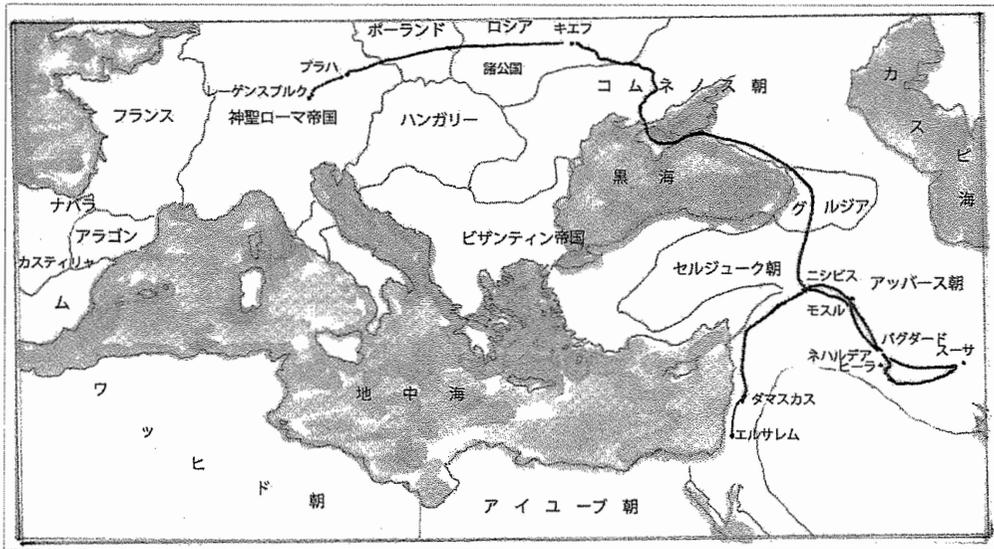
主として 12 世紀の時代、聖地イェルサエムをめざしたユダヤ教徒はすくなくなかった²⁾。その代表的な人物がスペインのナバラ・バスク地区に

うまれた、トゥデラのベニヤミン³⁾であろう。彼の後を追うようにして、スペインのイスラム支配下のトレード⁴⁾、中世以前は国家としてフランク王国とともにキリスト教を受け入れたトレードに生まれたユダヤ教徒の詩人としても名高いラビ・ユダ・ハレヴィ⁵⁾で 1140 年、スペインの南北部から海路でアレキサンドリアを経由してダミエッタ、カイロからイェルサレムに向かった。また、同じくラビ・ユダ・アル＝ハリズィー⁶⁾はトレードから南フランスのマルセイユから船を利用してダミエッタに向かい、イェルサレムに向かっている。

そこへいくと、レーゲンスブルクのパタヒアは一度も船舶を利用せずに内陸ルートを使った。彼の旅行は 1175 年と想定されているので、他のユダヤ教徒の旅行家に比べて半世紀も後であり、レーゲンスブルクからプラハ、キエフからドニエ

*人間学部コミュニケーション社会学科

レーゲンスブルクのパタヒアの旅程



Haim Beinart, Moshe Shaivi tr. (Jerusalem The Israel Map and Publishing Co.LTD, 1992), *Atlas of Medieval Jewish History*, p.46 を参考に筆者が日本語版として作成。

プル川沿いに黒海の東部をとおり、グルジアを経てセルジューク朝、アッバース朝へ向かっている。

彼の旅行がエルサレムに向かうことが一義的ではなく、各地のユダヤ社会の実態調査であったと思われる。しかも、彼がこれらの地を旅行したのは、ほぼ十字軍の時代と重なることも、その後続くユダヤ旅行家の系譜の初期を飾るものである。

中世のヨーロッパ地域のユダヤ社会は、主としてイスラム世界の支配下にあったアンダルシアとワイン産業で栄えていたドイツのライン川(ラインラント)であった。両者の交流・交際は想定以上に盛んだったとはいえない。ラビなどの中継人を介して交流はなかつたが、それほど顕著のものであったとはいえない。ただ黒海とカスピ海に面した中央アジアには、人種的にはトルコ系であるが、ハザール王国⁷⁾というユダヤ教国家が実在していた時代であった。

アンダルシアやラインラントなどで政治や経済の逸材を輩出したユダヤ社会は、迫りくるユダヤ教徒の弾圧と迫害をひしひしと感じながら生きていた。十字軍は異教徒であるイスラム教徒だけではなく、キリスト教異端派のカタリ派(アルビジョ

ワ十字軍)や自分たち(ユダヤ十字軍)にも襲い掛かろうとしていた。

ヨーロッパのあちこちに巨大にして壮麗なゴシック式のカテドラルが建設され、室内を見事なステンドグラスで飾り、経済的にも躍進していたのと対照的であった。

2. パタヒアの旅行記 (続き)

パタヒアは、ケデルの地を16日かけて通り過ぎた。ケデルの人々の遊牧生活を観察しながら、ハザールの地(ハザリーヤ)の近くを通った。ハザールは当時、トルコ系民族ながらユダヤ教徒であった。1日中、女性の晴れ着を着て、夜には父や母が亡くなったことを嘆き悲しんでいる、これは息子や娘といった家族の一員が亡くなったときも同様である。パタヒアはほぼ8日間かけてハザ

וְאֵין יְהוּדִים גְּמוּרִים בְּאֶרֶץ קְדֵר לְכִי אֲנִי
מֵינִיבִים : וְשֹׁאֵל לָהֶם רַבִּי סַתְחִיחַ לְמַח אֵינָם

מֵאֲמִינִים בְּרִבְרֵי קְבֻלוֹת חֲכָמֵינוּ ; כָּרָם לְבָרְכֵהּ
וְעָנוּ לוֹ בְּשִׁבְלֵי שְׁלֵא לְמָדוּם אֲבוֹתֵינוּ :

リーヤの地の国境のところに着いた。そこはやがて合流して1つの川になる17の河川が流れ、国の周囲を囲んでいた。

「ケデルの地には、ユダヤ教徒はいない。ただユダヤ教の分離主義者（訳注：仏訳者はカライト派ではないかと想定している）がいるだけだ。パタヒアは彼らに訊ねてみた。『なぜ賢者の言葉を信じないのか?』彼らは答えた。『賢者はわれわれになにも教えてはいない。サバトの夕方には全部のパンを切って、サバトにそれを食べる。』⁸⁾」

ラビ・パタヒアは「なぜわれらの賢者の言葉を信じないのですか?」と訊いてみた。それに対して、次のような答えがかえってきた。

וְיֹשְׁבֵי בְּמִקּוֹם אֶחָד כָּל
 הַיּוֹם : גַּם אֵינָם מְתַפְּלִים אֲלָא מִזְמוּרִים :
 וְקִשְׂאֵמַר לָהֶם רַבִּי פִתְחִיהָ הַתְּפִילּוֹת שֶׁלָּנוּ
 וּבְרִכַת הַמְּזוֹן שְׁנוֹהִים עָלַי מִי הַתְּלִמּוּדִי הִיא
 טוֹב בְּעֵינֵיהֶם אֲדָ אָמְרוּ לֹא שָׁמַעְנוּ מֵעוֹלָם
 מִה הוּא הַתְּלִמּוּד :

われらの祖先はわれらに次のように教えている。サバトの日に義務付けられてすべてのパンは翌日切り分ける。かれらは毎日、同じ場所にパンを置き、聖歌隊の朗誦だけで祈りを捧げる。この賛美の行為はタルムードに従って行われる。これらを称賛しているかのようだ。だが、これこそがタルムードと言うことを白状しているようには聞こえない⁸⁾。」

パタヒアはトガルマの地を通り抜けた。そこはイスラム法を信じているところだ。トガルマとはアララット山を望めるところであり、アルメニア（ならびにグルジア）と考えられる。アララット山が右手に見える。

パタヒアの旅行記は同時代、ヘブライ語で有名な旅行記を残したトゥデラのベニヤミンと同様、その地方のユダヤのコミュニティーに関心がある。これは今日でいうと、半分、ユダヤ教徒のためのガイドブックであるといえる。

הַגִּיעַ בְּאַרְץ אֲרָט עַבְרֵי בְּהָרִים הַנְּבוֹהִים
 עַד גְּצִיבִין וְעַד חוֹסֵן כִּיפָה פִּירִישׁ סֶלַע גְּדוֹל :
 וּבִסּוֹף הָרֵי אֲרָט חָלַף יוֹמָם לְצַד שְׂכַנְנָרוּ :
 וַיֵּשׁ בְּנִצְיָבִין קְהֵלָת גְּדוֹלָת וּבֵית הַכְּנֶסֶת שֶׁל
 רַבִּי יְהוּדָה בֶּן-בְּתֵרָה :

アララットの地に到着すると、ニシビシとヒスン；カイファを呼ばれる高い山々が続く。そこは（訳注補足 = チグリス川に通じる）岩の岸壁と言われるところである。アララット山の麓に辿り着いたところ、反対側の斜面で2日は要する。ニソビシの集落にはユダヤ教の大きなコミュニティーがあって、バテラの子息のラビ・ユダが建てたシナゴークがある⁹⁾。」

ラビ・ユダ・ベン・バテラは医者としても知られている人物で、タルムードに即した治療法で知られる。

パタヒアはハザール国（ハザールヤ）もトガルナもケダル国も自分たちの独自の言葉を使っていると記録している。ハザール国はトルコ語訛りのヘブライ語、トガルナ国がグルジア語、ケダルがアルメニア語であったと想定できる。グルジア語とアルメニア語は文字も異質なので、印象深かったのだろう。

それから、アッシリアに向かった。ハザールヤもトガルナも自分たちの言語は守っていたが、ビザンチンの皇帝に年貢を納めていた¹⁰⁾。

וּמִנְצִיבִין חָלַף רַבִּי פִתְחִיהָ בְּחַמְשָׁה יָמִים
 לְנִינוּת חַדְשָׁה וְנָחַר חֲדָקָל עוֹבֵר לְפָנֶיהָ
 וּמֵעֵבֶר הַנְּהָר חָלַף לְצַד אַחֵר מִחָלְף שֶׁלִּשְׂרָה
 יָמִים עַד בֵּא לְנִינוּת הַיְשִׁינָה :

「ニシビシから5日（訳注 = 英訳者は3日とし、ヘブライ語原文も3日になっている。）かけて新ニネヴェに行った。ニネヴェの前にはチグリス川に流れている。川の反対側に渡り、別の方角を3日行くと、旧ニネヴェがある¹¹⁾。」

רַבִּי פִתְחִיהַ בְּעֵת הַיּוֹתוֹ בְּנִינּוּהָ נָפַל חוֹלָה •
וְאָמְרוּ הַרוֹפְאִים שֶׁל הַמֶּלֶךְ לֹא אֵחִיהָ : וּמִנְהַג שֵׁם
כָּל יְהוּדֵי אֶרֶץ שְׂמֹנֶת הַשְּׁלֹטוֹן יִקַּח חֲצֵי הַמָּמוֹן
שֶׁלוֹ • וְכֹאשֶׁר רַבִּי פִתְחִיהַ הָיָה לְבוֹשׁ בְּגָדִים

נְאִיִם אָמְרוּ עֲשִׂיר הוּא • וּסּוֹפְרֵי הַשְּׁלֹטוֹן כִּבְדוּ
פָּאוּ לְקַחַת הַמָּמוֹן כְּשִׁמּוֹת : אֵדךְ רַבִּי פִתְחִיהַ אָמַר
לְחַזְעֵבִירוֹ אֵת הַנְּהַר חֲדָקְל כֹּל כֶּךָ חוֹלָה שְׁחִיחַ •
וְהַנְּהַר הַזֶּה רַחֵב וְאֵין עוֹבְרִין אוֹתוֹ בְּסַפִּינָה • כִּי
חֲנַחֵר חֲדָקְל חָר וְקַל וּמְהוֹפֵךְ אֵת הַסַּפִּינָה •

「パタヒアはニネヴェで病を患った。王の侍医
たちは致命的な病気だと断言した。この国では奇
妙な病気でユダヤ教徒が亡くなる時は、自分の
財産の半分をスルタンの宝庫に納める必要がある。
パタヒアはすばらしい衣服を身に着けていて、
金持ちと看做されていたので、パタヒアが亡くな
ればすぐに自分の財産をスルタンに差し出すこと
になる¹²⁾。」

パタヒアはこれまでの難病は、チグリス川の向
こう側で出ていると言い張り、チグリス川の反対
側までボートで運んでもらい、即座に治療を受け
た。

ニネヴェには象がいた。とても大きくてよく食
べた。ニネヴェはアッシリアの首都であった時代
もあり、旧約聖書でもよく知られていた。

アララットには大きな都市がいくつあったが、
ユダヤ教徒は古い時代と違ってほとんどいなかった。
近くのパベルではユダヤ教徒が平和に暮ら
していた。パベルにはユダヤの高等教育研究機
関(イエシュヴァ)があって、ラビ・シュローモ
が指導者であったが、パタヒアが来る1年前ほど
に亡くなった。パタヒアはポロスという大きな町
に行ったが、そこから1日ほどでバグダードに着
く¹³⁾。

בְּגֵדֵי הַיָּעִיר מְלוּכָה : וּבְהַ מְקוֹם הַשְּׁלֹטוֹן •
הוּא מֶלֶךְ גְּדוֹל וְחַמוּשָׁל וְשׁוֹלֵט עַל כָּל הָעַמִּים
סְבִיבָיו : בְּגֵדֵי עֵיר גְּדוֹלָה מְאֹד יוֹתֵר מִמֶּהֱלֶךְ
יוֹם כְּאַרְבָּה וּבְהִיקָף יוֹתֵר מִשְׁלֹשָׁה יָמִים : וַיֵּשׁ
בָּהּ כְּאַלְף יְהוּדִים • שְׁהוֹלְכִין בְּסוּדְרִין : וְאֵין רוֹאֵה
שׁוֹם אִשָּׁה בְּרַחוּב • וְאֵין אָדָם הוֹלֵךְ לְבֵית הַכִּירוֹ
בְּלֵי רַעַת •

「バグダードは王国の首都である。そこにはカ
リフ、つまりスルタンがいた。国を統治し、治め
る偉大な王である。バグダードはたいへん大きな
町で、町の端から端まで1日以上かかる。町を廻
るには3日以上行程だ。バグダードには1000
人のユダヤ教徒がいる。彼らは服をまとって歩い
ている。女性の姿は見かけず、友人の家でも中に
入ることはできない。隣人の妻を見かけることも
めったにない¹⁴⁾。」

メソポタミアはユダヤ教徒にとってバビロン捕
囚以来、ゆかりのある土地であった。パタヒアも
メソポタミアの記述は詳しい。バグダードも付近
周辺に行ったりして、何度か出入りしている。

バグダードのあるバビロンはユダヤ教徒にとっ
ては忘れぬことのできない場所である。バビロン
捕囚のとき、まだバグダードは城壁にも囲まれて
おらず、小さな寒村であったはずだ。それでも、
ユダヤ教徒で実際にバビロニアを訪れたことのあ
る人はそれほど多くはなかったはずである。

イエシュヴァの長であるガオンの時代はすでに
終わっていたが、それでもそれなりに詳細に記述
している。バビロン捕囚で名高い預言者のラビ・
ダニエルについても、同様である¹⁵⁾。しかし、
ここでは紙面の関係で詳細は省略したい。

וְהִלֵּךְ רַבִּי פִתְחִיָּה בְשָׁנֵי יָמִים מִבְּנֵי עַד קָצָה
בְּבֵל הַיְשָׁנָה: וְהָיָה פְּלִטִין שֶׁל נְבוּכַדְנֶצַּר הַרְשָׁע
חָרַב כְּלוֹ: וְאָצַל חוֹמוֹתָיו עֹמֵד וּבֵיתוֹ שֶׁל דְּנִיאֵל
כָּאֵלוֹ הַדָּשׁ: וַיֵּשׁ עוֹד שֵׁם הָאֶבֶן שִׁישׁ עָלָיו
וְהַשִּׁישׁ שֶׁסָּמָךְ עָלָיו רָגְלָיו: וְלִמְעַלְלֵה הָאֶבֶן
שְׁמוֹנָה עָלָיו הַסֶּפֶר שֶׁכָּתַב: וּכְבוֹתֵל אֲדָר שְׁבִין
בֵּית דְּנִיאֵל וּבֵין פְּלִטִין שֶׁל נְבוּכַדְנֶצַּר חִלּוֹן קָטָן
שֶׁהָיָה מְשֻׁלֵּךְ בּוֹ כְּתָבִים:

「ラビ・パタヒアは2日かけてバードから旧バビロニアの境界線まで行った。ネブカドネザル [訳注: 2世, 新バビロニア王国の2代目の王。2度にわたるバビロン捕囚で知られる] の邸宅はどこもひっそりとしている。王の家の近くに記念碑があって、ダニエルの家はいまでも新築したばかりに見える。ダニエルの家は石で出来ていて、大理石の石のかけらが残っている¹⁶⁾。]

パタヒアは旧約聖書と聖ダニエルにゆかり深いバビロニアにはしばらく滞在した。バビロニア滞在中の記録は詳細を極める。

וְשָׁהֲמַת פְּלָלִים נְעִיִּים שֵׁם:
וְאָמַר רַבִּי פִתְחִיָּה כִּי הָרִי אֲרִיט מְבָבֵל מִהִלָּךְ
הַמְשָׁח יָמִים: וְהָרִי אֲרִיט גְּבוּחִים מְאֹד: וְהָרִי
אַחַר גְּבוּחַ לְמַעַלָּה מִמֶּנּוּ אַרְבַּע דָּרִים אַחֲרָיִם:
שְׁנַיִם כְּנָגַר שְׁנַיִם: וְנִכְנְסָה הַתִּיבָה שֶׁל נֹחַ בֵּין
אוֹתָן חֲתָרִים וְלֹא יָכְלָה לְצֵאת מֵהֶם: וְאֵין עוֹד
חֲתִיבָה שֵׁם כִּי נִרְקְבָה:

「バビロニアを通過している間中、ラビ・パタヒアは次のようなことを証明している。その間、女性を誰も見ず、どの女性も全員がヴェールをしていて、控えめだ。誰もが家の中庭で入浴する。入浴する前にお祈りすることもない。どの旅行者も夜、旅をして、夏も同様である。だれもが夏でも冬でも同じ場所で育つ。ほとんど労働者は夜中に仕事を終わらす。事実、バビロニアはまったく別の世界だ。ユダヤ教徒は立法の研究と神の畏敬に時間を費やしている。イスマーイール派のイスラム教徒も同様である。商人たちによってはここバビロニアに来ると、商品を家において、外

出する。それから、商品は市場に売りに出される¹⁷⁾。]

バビロニアの生活、風習、慣習、実態に熱心なパタヒアだが、当地のユダヤ教徒のことも忘れてはいない。といて、トゥデラのベンヤミンと異なり、当地のユダヤ社会の指導者についてはほとんど触れていない。

וּבְבָבֵל יֵשׁ שֶׁל שָׁח בְּתֵי כְּנֻסוֹת לְבָר אוֹתָהּ
שֶׁל דְּנִיאֵל: כְּמוֹ שְׁאִמְרָנוּ כְּבָר: אֵךְ אֵין חוֹן שֵׁם:
אֵלֹא מִי שִׁיצוּחַ רֵאשׁ הַכְּנֻסָּה יִתְפַּלֵּל: אַחַד
אוֹמֵר בִּיתֵיר הַמָּאָה בְּרוֹכָת: וְעוֹנֵן אַחֲרָיו אֱמֵן:

וְאַחַר כֵּךְ יַעֲמוֹד אַחַד וַיֹּאמֶר בְּרוּךְ שְׁאִמְרַ בְּקוֹל
רָם: וְאַחֲרָיו יַעֲמוֹד עוֹד אַחַר וַיֹּאמֶר הַשְּׁכַחֹת:

(中略)

חֻזְנִים: וְלֹא יִדְבַר אִדָּם עִם חֲבִירוֹ בְּבֵית הַכְּנֻסָּה:
אֵלֹא עוֹמְדִים בְּתַרְבוֹת גְּדוֹל בְּלֵי נְעִלִים
וַיְחַיִּימִם: וְאֵם הַמַּתְפַּלֵּלִין טוֹעִין בְּגִינוּן: הָרֵאשׁ
הַכְּנֻסָּה מְרַאָּה לָחֵם בְּאַצְבָּעוֹ וְהֵם מְבִינִים אֵיךְ

「バビロニアにはシナゴグが聖ダニエルの家の近くに3つ¹⁸⁾ある。でも、そこには指導者もいなければ、イエシュヴァの長がいて、説明することもしない。そういうやり方なのだろう。1人が100の祝福を唱えようと、残りの人はアーメンと唱える。それから、誰かが低い声でブルーフ・シャルの祈禱を唱えようと、別の人が立ち上がり、皆で神を(訳者補足: 旋律をつけて)称えているが、ハーモニーにとなつて見事に1つになっている。でも、祈禱者の声はもっと早く朗読すべきかと思うように聞こえてならない。(中略)シナゴグでは、誰も隣の人に話しかけない。誰もが靴を履かずに裸足でいる。祈っている間、音程が狂っていて、イエシュヴァの学校長が指でサインを送っていた¹⁹⁾。]

パタヒアの記述を読むと、ユダヤ教といえども

イスラム教の慣習の影響が読み取れる。バグダードに滞在しているとき、パタヒアは小旅行をしている。10日ほどかけて各国から派遣されていた大使たちに会いに出かけている。ユダヤ教の律法は、エルサレムのタルムードではなく、バビロニアのタルムードに準じた律法が守られていた。貧困層のためのタルムードではなく、エジプト伝来の富裕層のためのタルムードだ。

וְשֶׁהַמֶּלֶךְ פִּלְלִים נְעִיִם שָׁם :
 וְאָמַר רַבִּי פִתְחִיה כִּי הָרִי אֲרִיט מִבְּבֶל מִהַלֵּךְ
 חֲמִשָּׁה יָמִים : וְהָרִי אֲרִיט נְבוּזַיִם מְאֹד : וְהָרִי
 אַחַד גְּבוּהָ לְמַעַלָּה מִמֶּנּוּ אַרְבַּע הָרִים אַחֵרִים :
 שְׁנַיִם כְּנֹגַד שְׁנַיִם : וְנִכְנְסָה הַחֵיבָה שֶׁל נָח בֵּין
 אוֹתָן הַהָרִים וְלֹא יִכְלָה לְצֵאת מֵהֶם : וְאִין עוֹד
 חֲתִיבָה שָׁם כִּי נִרְקְבָה :

「パタヒアによると、アララット山はバビロニアから5日かかる。アララット山は高い山だ。1つの山だけで、上のほうに4つの山があり、それぞれ2つが向き合っている。ノアの契約の箱がこの山と山の間に運ばれてから、(今まで)持ち出されたことはなかった。契約の箱はそこにはなかった。いつしか老朽化したのだろう。山は針の木のようなもので一杯、あとは草だ²⁰⁾。」

かつてバビロン捕囚でユダヤ教徒には余りにも悲しく、馴染み深い場所に、パタヒアは小旅行している。バビロニアことメソポタミアは忘れてたくても忘れ難い場所なのだ。西に向かい、ニネヴェからニシビスに向かっている。それから、ハランに向かい、さらに2つの川に挟まれたアラム・ナハラインに向かった。ニシビスには800人ほどのユダヤ教徒がいることも記している。さらにそこから、ホムスに向かった。どの町も名前は馴染みあるものであった。それこそ町から町にいくつも渡り歩いた。そして、アレppoに向かった。そこはアラム・ゾバフとも呼ばれていたところで、(預言者)アブラハムが群れを引き連れた山であった。貧しい人たちにミルクを与えたところだ。それから、非常に大きな町ダマスカスに行った。大きな町で、(当時は)エジプト王が統治していた。ユ

ダヤ教徒も1000人ほどいて、自分たちの王子を選んでいた²¹⁾。

そして、ラビである以上、エルサレムに行くことは忘れてはいない。

בְּאַרְץ יוֹן : יֵשׁ לְיִשְׂרָאֵל גְּלוּת גְּדוּלָּה וּמִשְׁעַבְדִּים
 בְּנוֹתָם : וַיֵּשׁ בָּהֶם בְּחֹרִים בְּקִיָּאִים בְּשִׁמּוֹת
 וּפְתוּכֹם רַבִּי שִׁבְתִּי : גַּם מִשְׁבִּיעֵים הַשָּׂרִים :
 שְׁמִשְׁרֵתִים אוֹתָם כַּעֲבָדִים : וַיֵּשׁ בְּאַרְץ הַזֹּאת
 קְהָלוֹת רַבּוֹת מִיְהוּדִים : שְׂאֲרֵץ יִשְׂרָאֵל אֵינָהּ
 יְכוּלָה לְשִׂאת אוֹתָם : אִם הָיוּ עָלֶיהָ :

אִם הִיְהוּדִים : מִיד בְּנָה הֵיכַל מֵאֶבֶן שֵׁשׁ
 אֲרָמִים וְיִרְקִים : וְכָל מִינֵי מְרֹאֵה : אֲדָ בְּאוֹ
 הַגּוֹיִם וְשָׁמוּ בּוֹ צַלְמֵיהֶם : וּכְאֲשֶׁר נִפְלוּ קִבְעוּ
 אוֹתָם בְּעֵינֵי הַכּוֹתֵל : וְאוֹלָם בְּמָקוֹם שֶׁהָיָה
 מִלְּפָנִים הַקֹּדֶשׁ קָרְשִׁים : לֹא הָיוּ יְכוּלִים לְעִמּוֹד
 צְלָם :

בְּצַד זֶה הַהֵיכַל : יֵשׁ הַשְּׂפִיטֵל שֶׁהַעֲנַיִים נוֹזְנִים
 וְרוֹחַ מִשָּׁם יֵשׁ שׁוֹחָה : הַנְּקֵרָאת גֵּיא בֶן־הַגּוֹם
 וְשֵׁם בֵּית הַקְּבֻרוֹת שְׁלָהֶם :

「それから、彼 (=パタヒア) はエルサレムに出かけた。ユダヤ教徒は染物師のラビ・アブラハム1人[訳注：ベニヤミンは200人いると記している]だけで、そこに居住する約束を得る代わりに王に高い税金を払っている。ラビはオリーブ山を見せに連れて行ってくれた。石畳の舗道は3キュービットの高さがあり、幅もそのように目撃された。そこにはむかしイスマール派の連中が建造した美しい宮殿があった。そして、エルサムはなおイスマール派の手にあつたが、その後、なんの地位もない人たちがやってきて、イスマール派の王に悪口を報告して、こう言った。『われらには神殿や宮廷の担保を知っている老人がいます。』すると、王は彼を呼んで、彼を凝視した。王はユダヤ教徒には友好的だったので、次のように言った。『われはここに神殿を建てたが、ユダヤの民はここで誰も礼拝出来なかった。われは美しい建物を赤や緑などのいろいろな色の大理石で石の神殿を建てた。それから、異

教徒たち（ここではキリスト教徒のこと）がやってきて、そのスケッチを描いたが、そのあと何もしなかった。彼らは壁の分厚いところにスケッチを隠した。しかし、いかなる場所の聖なるところで他に何もしなかった。別の場所には貧しい人々のために病院を建てた』²²⁾。」

当時、エルサレムは十字軍 (=キリスト教徒)の支配下にあつて、いつもユダヤ教徒と小競り合いが続いていた²³⁾。エルサレム巡礼に向かうキリスト教徒たちを弾圧し、迫害したのは、歴史的に正確に言うとはセルジューク・トルコだけではなく、北アフリカやエジプトが拠点のイスラム教シーア派の一派であるイスマーイーール派に依るものであり、また、ユダヤ教徒にはユダヤ十字軍を、キリスト教徒の異端派のカタリ派に対してはアルビジョワ十字軍を差し向けたのである。また、ここでいうキリスト教徒は、具体的にはキリスト教徒のために病院を建てた聖ヨハネ騎士団（後のマルタ騎士団）である。

כָּל אֶרֶץ יִשְׂרָאֵל • כְּאֲשֶׁר גִּזְרָה לְעֵינַי • מִחֶלֶד
שְׁלֹשָׁה יָמִים : וְרָאָה רַבִּי פִתְחִיהָ יַם הַמֶּלַח
וּמְקוֹמוֹת שְׁחִי שֶׁם סָדוּם וְעַמּוּרָה שְׂאִין בָּהֶם
עֵשֶׂב • אֲמַנָּם הַנְּצִיב מֶלַח אָמַר שְׁלֹא רָאָה כִּי
אֵינּוּ בְּעוֹלָם עוֹד : גַּם הָאֲכָנִים שְׁחִקִים יְהוֹשֻׁעַ
לֹא רָאָה :
מִשָּׁם חֶלֶד : לְחֶבְרוֹן • וְהִנֵּה רָאָה חֶבְרוֹן שְׁבָנָה

「イスラエルの地を周遊するとほぼ3日かかる。パタヒアはソドムとゴモラに描かれた塩の海〔訳注：死海のこと〕を見た。そこには草一本もなかった。塩の柱は見られず、もうすでになかった。パタヒアはヨシュアの選んだ石もみることが出来なかった。それから彼はヘブロンに行った。パタヒアは洞窟の先に巨大な宮殿を見た。そこは我らが父の預言者アブラハムが建てたものだ。そこには27から28キュービットの巨大な岩がある²⁰⁾。」

旧約聖書によると²¹⁾、エリコの町の東の境にあるギルガルに野営したとき、ヨシュアは「ヨルダン川から取った十二の石をギルガルに立て、イスラエルの人々に告げた。『後日、あなたたちの

子供が、これらの石は何を意味するのですかと尋ねるときには、子供たちに、イスラエルはヨルダン川の乾いたところを渡ったのだと教えねばならない。』」

הָיָה רוּחַ סַעְרָה יוֹצֵא וּמְשַׁלְּכֵנוּ לְאֲחֻרָיו :
בְּיַד יִשְׂרָאֵל יֵשׁ שְׁעָרִים וְקוֹרִינְתֵינוּ לֹא שְׁעָרֵי הָרְחֵמִים
וְהוּא מִמְּלֵא אֲבָנִים וְסִיד וְאֵין שׁוּם יְהוּדִי רִשְׁאִי
לְבֵא שְׂמֵהּ וְכָל שְׂבָן נוֹי • וּפְעַם אַחַת רָצוּ הַגּוֹיִם
לְהַסִּיר וּלְפַתּוֹחַ הַשְּׁעָרִים וּגְתַרְשָׁה אֶרֶץ יִשְׂרָאֵל
זְחִיתָה מְהוּמָה גְדוֹלָה בְּעִיר עַד שְׁחָרְלוּ : וַיֵּשׁ
מִסּוּרֵת בְּיַד הַיְהוּדִים שְׂרָרָה אֹתוֹ שְׁעָרֵי גִלְתָּה
הַשְּׂבִינָה •

「エルサレムには門があつて、慈悲の門（訳注：現在の黄金の門のこと）という名前だ。門は石と石灰岩で満たされている。ユダヤ教徒はいないが、いまなおほんの少数の異教徒（キリスト教徒）がいて、ここに来ることが許されている。ある時、異教徒のキリスト教徒がゴミを捨てようとして、門を開けたとき、町中にパニックが襲った。彼らは逃げ出した（シクナ）。ユダヤのしきたりでは、神の栄光は門を通して実現できる。いつか戻ってくるはずだった²²⁾。」

それから、ダマスカスに行つたとパタヒアは記録している。ダマスカスにはシナゴークが2つあり²³⁾、巨大で、シナゴークとして何もかも完備していると記している。

そこから、マムラに向かった。樹木がたくさんあるところで、天使が残していった木のある老人が見せてくれたとパタヒアは自分の息子に語っている。その木の果実はとても甘美であつた。

בְּאֶרֶץ יוּן • יֵשׁ לְיִשְׂרָאֵל גְּלוּת גְּדוֹלָה וּמְשַׁעֲבָדִים
בְּנוֹפֶם : וַיֵּשׁ בָּהֶם בְּחֻרִים בְּקִיאִים בְּשִׁמּוֹת
וּבְתוֹכָם רַבִּי שְׁבָתִי : גַּם מְשַׁבְּעֵים הַשְּׂרִידִים •
שְׂמִשְׂרָתִים אֹתָם כְּעֶבְרִים : וַיֵּשׁ בְּאֶרֶץ הַזֹּאת
קְהָלוֹת רַבּוֹת מִיְהוּדִים • שְׂאֶרֶץ יִשְׂרָאֵל אֵינָה
יְכוּלָה לְשִׂאת אֹתָם • אִם הִיוּ עֲלֶיהָ :

「ギリシャでは、ユダヤ教徒は大変な迫害を受

けてきた。ギリシャのユダヤ教徒は残酷なほどの奉仕に耐えてきた。かれらは降霊術師に知り合いの学生の中にいるように見えた。かれらは悪魔を呼び起こすことに熟知していて、悪魔の魂をもった謀反人がどれいのようにギリシャ人に献身することを強要されているかのようだ。ギリシャにはそれこそたくさんのユダヤ教徒のコミュニティがあって、それにはイスラエルの地は含まれていない²⁴⁾。」

3. ラビ・パタヒアの旅行記は誰のために書かれたか？

著者のパタヒアは末尾を次のように締めくくっている。「これはレーゲンスブルクのパタヒア言葉の末尾である。²⁵⁾。」

仏訳のみ下記の部分のヘブライ語が終わりのあとに収められている。

פְּרִיץ רַחֲמָנָא דְיָהֵב חַיִּילָא לְעַבְדֵיהּ מֵאִיר בְּרַמְבּוּלִי לְהַעֲתִיק דְבָרֵי
הַחֲכָמִים רַבֵּי פִתְחִיָּה מְרִינְגֶנְבוּרְגִי אֲדֹחוּ לְפִי רַבֵּי יִצְחָק הַלֵּבֶן הַרְבֵּי
נִחְסֵן מְרִינְגֶנְבוּרְגִי פֶּחַ קוֹלְמֵר בְּחֹרֵשׁ עֲנֹשׁ לְעֵת חֲמִשָּׁת אֶלְפֵיָם
וְאֵרִיבֵת מֵאוֹת תְּעֻרָה לְיַיִתָּה הַעוֹלָם :

「パタヒアはこの話を彼の奉公人のメイル・カルメリに託した。彼はレーゲンスブルクのパタヒアの話の写本を作った。彼はレーゲンスブルクの2人のラビであったイサク・ハルビンとラビ・ナフマンとは兄弟である。ナフマンは『世界周遊』(Tour du monde) という表題で天地創造から5410年(ユダヤ暦)サバト月に本書をコルマルで刊行した²⁶⁾。」

ユダヤ暦は、神が世界を創造した日をユダヤ元年とする。すなわち、西暦に直すと紀元前3761年10月7日を紀元とする。1ヶ月は29日あるいは30日とする太陰暦で、正式の換算表はないが、タルムード時代に改訂作成されたユダヤ暦はほぼ西暦に3760年を足したものに等しい(19年に7回、閏年を設けている)。現在、フランス領のアルザス地方にあるコルマルは、1681年までは神聖ローマ帝国領で、ユダヤ教徒のコミュニ

ティーが出来たのは、13世紀中葉のことである。以上のことを配慮すると、近世になって、アルザスのユダヤ社会が商業的に発展した16世紀以降、活版印刷術が発明されてから本書は刊行されたことになる。

それにしても、パタヒアはなぜ旅行記を口述筆記させたのだろうか？ 考えられることをいくつか想定してみた。

- (1) ラビは各地から集まったラビの子息などを大きなユダヤのコミュニティがある町しかないユダヤ高等教育機関(イエシュヴァ)などに派遣し、ラビになるための教育や研鑽を行い、そして各地に戻っていった。ユダヤ教徒同士しか結婚できないユダヤ社会は実質的にラビが仲人役であった。ラビたちは旧約聖書の地を旅して来たラビを重宝し、その情報に飢えていた。
- (2) 12世紀はヨーロッパを中心に経済的・商業的に飛躍した時代であり、機会があれば彼らの聖地エルサレムに旅したいと考えていたラビなどは少なくなかった²⁷⁾。
- (3) ユダヤの旅行家の記録は12世紀から始まり、その後も絶え間なく続いて書かれた²⁷⁾。
- (4) レーゲンスブルクはバビロニアのスーラとならび、キリスト教世界でのユダヤの学問の中心地のラインラントのマインツなどにも近いだけではなく、船舶を使用しないでほとんど徒歩で、ドナウ川沿いにバビロニア方面に向かったレーゲンスブルクのパタヒアの旅行は貴重な体験の記録であった。
- (5) 中央アジアに栄えたトルコ系民族のハザール王国が成立し、主として中近東からユダヤ教徒を集め(723年頃～944年)、アラブ、ビザンチン帝国と戦い勝利しながら、ハザールの国王ブランがユダヤ教に改宗し、ユダヤ国家として発展した²⁸⁾。
- (6) ハザール王国の衰退後はルーマニアなどの地域に移住した(1100頃～1150)。ハンガリーではハザール王国から来たユダヤ教徒との結婚を禁じた(1309年)。
- (7) ユダヤ教徒によるハザール王国が衰退し、リ

トアニアなどに移住、イーディッシュ語を使い始めた。

- (8) グーテンブルクの発明したルネサンスの発明の1つである活版印刷術はヘブライ語書物の印刷にも革命をもたらし、ユダヤのコミュニティーのある各地でヘブライ語印刷が始まったが、実際はグーテンベルク以前から新技術印刷物が刊行されていた²⁹⁾。
- (9) ラビはしばしばシナゴークに付属していたユダヤ初等学校で簡単なヘブライ語や後期アラム語（タルムードの注釈に使われた言語）の読み書きを教えた。そうだとすると、仏訳の底本になったヘブライ語にニクダ（ヘブライ語の母音記号）がついていたのも理解できる。ただし、英訳本の底本にはニクダはまったくない。
- (10) 当時、遠方から戻ってきた人物はみんなの憧れだった。かれらが嘘とも真実ともいえない話を聞くのは、村や町から1歩も外の世界にでかけたことのない人々にとってその話はみんなの情報源であった。これはユダヤ社会でも同様で、ユダヤ商人とラビは遠方に旅に行ける稀有な存在であった。かららのもたらす見聞記は写本から多くのコピー本が作成されたのは事実である。

4. 終章

レーゲンスブルクのパタヒアの旅行記は、憶測はさておき異質であることには変わらない。確かに、ユダヤ社会のことは触れてはいるが、詳細を極めているわけではない。安易なヘブライ語から他のユダヤ共同体の同胞に語ったと考えられなくもない。とはいえ、旧約聖書の名所案内ともいえない。一体、何のために彼の旅行記は書かれたのか？ 疑問をもちながら、本稿を終わらせるのが残念ではある。

それにしても、主要西欧語に翻訳のあるトゥデーラのベニヤミンに比べ、レーゲンスブルクの旅行記は半ば幻の旅行記であった。たしかに、フランス語とヘブライ語の対訳はすでに1831年刊行されている³⁰⁾。ちょうど、この本が一般に流布し

たのは、ちょうど王政復古と植民地主義で中東やアジアに人々が出かけることができる時代であった。そう考えると、本当の理由は案外、そんなところかもしれない。

注

- 1) *Haim Beinart, Atlas of Medieval History*, Jerusalem, 1992, p.46 を底本に作成。
- 2) *Elkan Nathan Adler, Jewish Traveller (801-1755)*, London, 1930, New Delhi, 1995 にはこの期間の歴史に名前を残した著名な旅行家が紹介されている。とくに pp.64-91 は Rabbi Petachia of Ratisbon に割かれており、また英文ながら他の旅行家についても概要を知ることができる。
- 3) かつて未完成にはおわたが、トゥデーラのベンジャミン（ベニヤミン）について詳しく紹介したことがある。「トゥデーラのベンジャミンの旅書簡—(1)～(4)」、『文京女子大学研究論集』(1999, Volume 1, Number 1, 2000, Volume 2, Number 1, 2002, Volume 3, Number 1) 『文京学院大学研究紀要』(2003, Volume 5, Number 1) に所収。
- 4) スペインのトレードは西ゴートの首都でもあった城塞に囲まれた中世都市であった。それとともに、ユダヤ教徒、イスラム教徒、モサラベ（イスラム教徒に同調する同化キリスト教徒）たちの共存した町として知られる。少し以前、西ゴート王国のユダヤ教徒弾圧策（たとえば、ユダヤ社会の指導者の子息たちは5歳になると敬虔なキリスト教徒の家に預けられ、12歳までキリスト教徒として育てられた。）があったのと対照的である。Cf. *Encyclopedia of Judaica*, Jerusalem, 1972, vol.15, pp.1198-1206 なお、トレードは厳しいスペインの悪名高いユダヤ追放令を5世紀に渡り逃げ切り、マドリッドにイギリスのロスチャイルド商会の支店が出来て、追放令が解除されるまで、2つのシナゴークがキリスト教会の振りをして生き延びたことでも知られる。
- 5) *Elkan Nathan Adler, op.cit.*, p.37,
- 6) *ibid.*, pp.111-114
- 7) ハザール王国はユダヤ教国家ではあるが、イスラエル12支族の血縁を引き継いでいるわけではなく、人種的・民族的にはトルコ系であ

る。ユダヤ教は母系の宗教であり、ユダヤ教徒の女性と婚姻関係を結ぶときは、相手の男性がユダヤ教に改宗するだけでなく、習慣や儀式もユダヤ教を遵守する必要がある。ただし、19世紀にヨーロッパで誕生した改革派のユダヤ教は含まない。ハザールの概要については、*Encyclopedia of Judaica, Jereslem*, 1972, vol.10, pp.943-954ならびに Kevin Alan Brook, *The Jews of Khazaria*, Second Edition, Lanham, 2010などを参照のこと。

- 8) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.17, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.6
- 9) Eliakirn Carmoly, *Tour du Monde ou Voyages du Rabbin Petachia de Ratisbonne dans le Douzième Siècle*, Paris, 1831, p.17. Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted, *Travels of Rabbi Petachia, of Ratisbon*. London, 1856, p.6 ちなみに、Part 2の作成を前にして、Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted, *Travels of Rabbi Petachia, of Ratisbon*. London, 1856を併用して参照することが出来た。同書はヘブライ文字による原文と William F. Ainsworthによる英訳の対訳であり、ヘブライ文字にはニクダ(母音記号)が付されていない。なお、両著書のヘブライ語原文を照合すると、若干の差異が散見しないわけではないが、出典のみ注記し、とくに際立った差異があったときのみ、注記する形で補足した。Part 1の論文作成時には前著を参照出来なかったことを補完できればと思う。頁数の明記は基本的にヘブライ語の該当箇所に準拠する。(なお、両著ともヘブライ語と英語またはフランス語との対訳であるが、ヘブライ語原文は左右ともさかさまであり、引用にあたってはヘブライ語の頁数を明記した。奇数ページが William F. Ainsworthのもの、偶数ページが Eliakirn Carmolyのものである。)
- 11) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.19, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.8
- 12) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.21, 0.23, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.10
- 13) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.23, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.10
- 14) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.27, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.14
- 15) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.45, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.16
- 16) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.71, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.42
- 17) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.73, p.75, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.44
- 18) なお、これについて仏訳者はシナゴークが3つ、英訳者は30としているが、ヘブライ語テキストはどちらも3(salsa)になっている。英訳者の誤解だろう。
- 19) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.73, p.75, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.42
- 20) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.79, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.48
- 21) この部分は引用翻訳こそしなかったが、主として、Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.79, p.81, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.52の要約である。
- 22) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.99, p.101 Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.60, p.60
- 23) 十字軍はイスラム世界(それも実際はセルジューク朝ではなく、イエルサレムに巡礼に来たキリスト教徒を迫害したのは、シーアのイスマール派だった)だけではなく、ユダヤ教徒にもキリスト教異端派(とくにカタリ派)にも向けられた。
- 24) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.101, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.60, p.62
- 25) 「ヨシユア記」第IV章—第20～22節(引用にあたっては日本聖書協会の新共同訳を使用し

た.)

- 22) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.105, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.64
- 23) *ibid.op.cit.* これについて, Eliakirn Carmoly はシナゴークが2つ(双数形), Dr. A Benisch & William F. Ainsworth は1つ(単数形)と記している. この相違はヘブライ語の文字でいうと目立たない文字が1つ(ローマ字のアルファベットでいうとアスタリックに似た yod) だけで, どちらが正しいは不明. ゴミとも読めなくはない.
- 24) Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, p.109, Dr. A Benisch & William F. Ainsworth ed./noted,*op.cit.*, London, 1856, p.66
- 25) ただし, 末尾の部分は仏訳者と英訳者がことになっているだけではなく, ヘブライ語原文にも違いが見られる.
- 26) この部分は Eliakirn Carmoly, *op.cit.*, pp.112-113 のみにヘブライ語, フランス語訳があるのみで, 英訳本には含まれていない.
- 27) 詳しくは Elkan Nathan Adler(注2 参照) の前掲書のほか, Haim Harboun, *Les Voyageurs juifs du XIIIe, XIVe et XV*, Aix-en-Provence, 1988, Haim Harboun, *Les Voyageurs juifs du VIIe siècles, Aix-en-Provence*, 1989 参照のこと.
- 28) 以下, ユダヤの年表の部分は, Kevin Alan Brook, *The Jews of Khazaria*, Lanham, Second Edition=2006, pp.247-250 に依る.
- 29) 最初のユダヤ教徒が関わった印刷物は 1444 年頃, アヴィニヨンで見られた. ユダヤ教徒のカルドルースのダヴィンは新しい印刷術を考案し, 最初のヘブライ語の書物を刊行している. 旧約聖書の注釈で名高いラシーの注釈が付いたモーセ5書が最初の書物だったという. *Encyclopedia Judaica*, vol.13, p.1095, Jerusalem, n.d.
- 30) 筆者が使用し版元の1つが本書完全コピー本 (M.E.Carmoly, *Tour du monde ou Voyages du Rabbi Pethachiab de Ratisbonne*, Paris, Imprimerie Royale, M.DCCC.XXXI) である.

ここでは省略した.

補足

翻訳では仏訳本, 英訳本を参考にしながらも詳細な解釈は仏訳を優先した. また, 英訳でイスラエルとなっている部分は仏訳ではパレスチナとなっているが, ヘブライ語原文がイスラエルになっているので, 政治的な意味でのイスラエルとしてではなく, 地理的なイスラエルとしている.

(2018. 9. 21 受稿, 2018. 10. 29 受理)

参考文献

邦語, 翻訳書, 原著を含め, 注に明記しているので,

